

クラスでバカにされてる
オタクなぼくが、気づいたら
不良たちから崇拜されてて
ガクブル

諏訪錦 Suwanishiki



アルファポリス文庫

この作品はフィクションであり、実在の個人・団体・事件などは、一切関係ありません。

プロローグ

その日はむしゃくしゃしていた。

クラスメイトの嘲笑、蔑む瞳。あるいは見て見ぬふり。オシに居場所なんてないんだ。この世界には、きつと。

現実から逃げ出すように、あるいは居場所を探すようにネットの世界を徘徊していると、あるサイトに不思議な書き込みを発見した。

【異世界への扉が、汝の前に開かれようとしている】

画面をスクロールさせていくと、複雑な幾何学模様の画像があらわれた。

【扉のカギはすでに開かれている。汝、決断の刻が迫る】

画面には幾何学模様と、それが描かれた壁が映し出されている。よく見るとそれは、オレの家からほど近い場所にあるガード下の風景に違いなかった。

惑れるはずもない。

そこはついでさつき、クラスメイトに金を脅し取られたばかりの場所だったから。

オレはなんの気なしに行動を開始していた。携帯電話だけを持って家を出ると、一〇分ほどで目的地のガード下に到着する。薄暗く、人気がないそこには、先ほど通ったときにはなかったはずの、あの画像にあつた幾何学模様が現れていた。

「なんなんだよ、これ」

そう思い、幾何学模様に触れると、体全体が強い光に包まれるのを感じた。

目がくらみ、まぶたを閉じ、思わず体を庇うようにして腕を体に絡ませる。

いったいながオレの身に起きようとしているのか、恐怖で強張る体を襲ったのは、一迅の風だった。

春の穏やかな風のように暖かい空気が、草々の青臭い香りを運んでくる。

いまは真冬のはずなのに。

そう思い、目を開けると、その先にはどこまでも続く草原が広がっていた。

地鳴りのような耳を突く雄たけびが聞こえ、空を見上げると、巨竜が大きな翼を広げて大空を旋回していた。

現代人が、こういう異常事態に遭遇したときに真っ先に手を伸ばすのが携帯電話。だが、画面を開くと、そこには圏外の文字。

目の前に広がる異常な事態に、オレの口から出たのはハハ、という乾いた笑い声だった。

あのサイトに書かれていた言葉。

異世界への扉が、オレを受け入れた。

クソみたいな日常から抜け出し、オレは心躍る冒険に出る、その一步を踏み出した。



「共感やばい、キタコレ」

本日、一〇月一〇日深夜二時二七分、伝説はここから生まれた。

テレビ画面の前、ぼくは抑えきれない興奮を言葉では表現出来ず、荒ぶる鷹のポーズ——左右の腕と左足を曲げ、威嚇するようなポーズのことだ——でなんとか気持ち落ち着かせようと努力していた。

家族を起こさないように配慮するとか、ぼくってホント親孝行者。

今日から放送開始のアニメ、『ドドメキ〜ドドメキ明星貴族学園〜』の第一話を見て、ぼくは主人公の境遇に信じられないくらい共感を覚えていた。

ぼく、間久辺比佐志の居場所はこの世界にない。

きつと異世界に行つて、そこで異能力を開眼させ無双して、異能者の集まる学園に入學させられ、そこでも異世界の人間として注目されながら、ぼくの強さに惹かれたヒロインたちが集まってきてハーレム形成。これこそがぼくの居場所に違いない。

アニメの原作小説を読みながら、それでも高ぶる気持ちを抑えられずにいた。

アニメ、ゲーム、漫画、ラノベ、そういったサブカルに傾倒して長いぼくだが、ここまでの興奮を覚えたのは、親に隠れて初めて深夜枠のアニメを見た日以来かもしれない。

だめだ、一向に興奮が収まらない。

ぼくはアニメの主人公と同じく、居てもたつてもいられなくなり、自室を抜け出すと、こそーつと家を後にした。

ガード下、ガード下つと。

目的の場所は最寄り駅の近くにあるガード下。

原作ではわからなかったが、映像化されたアニメに出てきたガード下は、ぼくの知る場所にとことなく雰囲気が出ていた。まさかモデルにしたとかかな。それなら、原作ファンとしては行かないと。聖地巡礼するしかないっしょ！ つてな具合に足を向けて——たどり着いてみて思った。

怖いよ。

深夜のガード下とかヤバいつて。主人公だけでなく精神強靱だよ。なんか聞こえてもいいなのに足音とか聞こえてくる気がして心臓が痛い。

ガード下の壁は灰色の無骨なコンクリート造り。だが、当然のことながらそこに異世界へと通じる魔法陣は描かれていない。分かりきっていたことだった。

それにしても、ここまでアニメと酷似した環境で、そこに重要な魔法陣だけが抜け落ちている状況というのは我慢ならない。

ぼくは家を出る際持ってきていた、プラモデル用のスプレーインクを取り出した。

魔法陣のデザインは、原作ラノベの挿絵でも見えていて、しっかり頭の中に入っている。ふつと息を吐き出すと、脳内のイメージを固定させ、ぼくは壁に向かってスプレーインクを噴霧させた。時間にしておよそ五分ほどで、壁にはアニメと同じ魔法陣が現れる。

ぼくは満足すると、そつと手をのばし、アニメの主人公と同じように絵に触れてみた。

まあ、どうせぼくの世界はなにも変わらないとわかっているけどね。

当然の結果に、それでも少しがっかりしながら魔法陣から手を離しかけたそのとき、眩い光がぼくの体を包み込んだ。光を手で遮りながら、目を細め、次に起こる展開に期待する。

これはまさしくアニメと同じ状況つ。

さあ異世界の扉、開け、早よ！

「……あれ?」

ところがここまでアニメ通りに進んでいた事態が急変し、「 temeエそこでなにしてやがる」と野太い男の声がかけられた。

光に目が慣れはじめ、声の方に目をやると、そこにはバイクに跨よがった男の姿が。しかも一人じゃない。ざっと見ただけで五人以上いる。

どうもおかしいと思っていたんだ。さつきから心臓がやけにドッドドドと激しい音をさせていると思ったら、どうやらあれはバイクのエンジンの音だったようだ。普通聞えないだろう、というツツコミがどこからか聞こえた気がしたけど、言つとくがいまのほくは普通の精神状態ではない。なんたつてアニメと同じように壁に触れた瞬間に光に包まれるとか、本来なら感涙かみなみにむせび泣いていてもおかしくないレベルなのだ。

しかし、今度は本当に心臓の音が、それこそ自分の耳にまで聞こえるのではないかと、うくらい激しく鳴っていた。

バイクに乗った男たちは、恐らくこの街にいくつもある不良グループのどれかに属している連中に違いなかった。

正式な街の名前をもじって狂マッドシテイった街なんて不名誉な愛称で呼ばれるこの街には、非常に残念なことに、彼らのような一筋縄ひとすじなわではいかない若者が大勢いるのだ。

ぼくのように健全な若者にとって、この街で生活することはレベル1の状態レベル1の状態で難易度の

高いダンジョンに挑むみたいなことだ。絶対に勝てない敵とのエンカウント率が異常に高い、みたいな。それどんなクソゲーだよ。

まあ、ぼくの人生からしてホント、クソゲーみたいなものだ。

だったらと、ぼくの頭の中にコマンドバトル風の選択肢が現れる。

……た、たたかう?

・特殊能力

・アイテム

・逃げる

うむ、たたかうの文字の表示からして脳内コマンドのやる気がないのは明らかなので、取りあえずアイテムは……っと、だめだ、肌色がいっぱいな青少年閲覧禁止状態青少年閲覧禁止状態のスマホしか所持していない。これ見られたら明日から生きていけないよ。

ならば、特殊能力を確認してみよう。
特殊能力を脳内でポチッと。

・荒ぶる鷹のポーズ(MP877)

→これ一択。

……めっちゃMP消費しますやん。

しかし、そうなると選択肢は一つ。

「あ、空飛ぶ猫耳メイドだっ」

ええ、誰も振り向きませんでした、はい。

まあとにかく、やれることといえばこれ、三十六計逃げるに如かず！

踵を返したばかりは、不良たちが居る方とは反対側に向かって逃げ出した。

「あ、待ちやがれ！」

叫ぶ不良。相手はバイク。普通だったら逃げられるはずもないが、幸いなことにこのガード下は一般の道から階段を数段降りた低い位置にあるため、バイクに乗ったまま通り抜けることは出来ない。つまり、ぼくを追いかけられるにはバイクから降りなければならず、そこまでして彼らがぼくを追いかける理由もないはずだ。

と、思っていたのだが、連中の内三人が跨っていたバイクを乗り捨てての勢いで降りると、叫び声をあげながら追いかけてきた。

「俺ら三人で追うから仲間呼んで来いっ！」

と恐ろしいことを仲間に表示した男は、次に「テメエこの野郎！」とぼくに向かって怒声を発する。

「ウチのチームのシマ荒らすたあ、どういうつもりだっ！」

「スカイラーズを舐めやがって、後悔させてやらあ！」

ファミレスチェーンみたいな名前の不良グループ三人がすごい剣幕で追いかけてくる。状況はまるで理解出来ていなかったが、ぼくに対してかなり腹を立てているのだけはわかった。

こつちとしても身の安全がかかっているため全力疾走だが、いかんせんインドア派という言葉で濁したオタクの全力など高が知れているため、その距離は徐々に詰められてしまふ。

ああ、もうホント嫌だ、泣きそうだ。

最後の力で踏み入った公園で、力尽きた膝が崩れて盛大に転倒したばかり。なんでこんな目に遭わなければならぬのか、清廉潔白な自分にどうしてこんな罰を与えるのか、天を睨み付けるようにして、神様ってやつを恨んだ。

あ、転んだ拍子にポケットから飛び出したスマホ。

しかも、落ちた拍子にどこか触れたのか、画面には肌色を晒した二次元キャラの画像が。ぼくはそっとスマホを拾い、ポケットに仕舞うと、もう一度、天を睨み付けて思った。

清廉潔白なほくが、どうして。

「チツ、手間あ、取らせやがって」

肩で息をする不良連中が、少し遅れて公園に入ってきた。

このときになってようやく、ほくは言い訳の言葉を口にしようと考えた。だが、いまままでに経験したことがないほどの体の疲労感と、上がる息、そして不良を前にしたときの圧倒的緊張感から、まともな言葉が出てこない。

なにかの犯人と決めつけてくる彼らに、ただ必死で「ほくじゃない」という旨の言葉を絞り出すのが精いっぱいだった。

「一目散に逃げ出しといて、いままら言い逃れとか見苦しいぜ。テメエも不良やってんだったら、男らしく正面切ってかかってこいや！」

いえ違います、ほく不良じゃないです。

というかそれと正反対の存在です。

なんてことを言っても、どうせ信用してもらえないんだろな。

やだな。サイコ漫画とか、FPSとか好きだけど、痛い嫌いなんだよ。

そんな当たり前のことを考えながら、この理不尽な状況に諦めをつけようと考えてみる。だからという訳ではないが、ほくの意識は完全に自分の内面、そして追ってきていた不良たちに集約されていて、周りのことにまで意識を向けていなかった。

そう、まさか公園に誰かが居るなんてこと、考えもしなかったのだ。

「うるせえなあ。ご近所迷惑考えるよ、おい」

コンクリートで出来たカマクラのような形の遊具からのつそりと出てきた男は、気だるげにそう言いながら、あくびを漏らした。

「「ホームレスだ」」

「ホームレスだ」

あ、ヤバ、不良たちとシンクロしちゃった。

ほくらの言葉に男はムツとしたのか、「ああ？」と凄む。

「誰がイケメンホームレスだ」

誰もそんなこと言っていない。

よく見ると、ほくとそう変わらない若い男だということが、公園の街灯の弱々しい光でもわかる。身長は同世代の平均的な体躯のほくより頭一個分高く、そして手足も長い。

ただ残念なことに、耳や唇、鼻にまでいくつもピアスをつけていて、しかも極め付けに頭部の目立った赤い髪を見た瞬間、その人物がまともではないとわかってしまった。

絶対にこの人も不良だ。しかも、性質の悪い部類の。

そんな風に思っていると、事態は思わぬ方向へと動いた。

さっきまで威勢よくほくを追いかけてきていたサイゼだかなんだかっていう不良グルー

プの一人が、及び腰になったのだ。

「お、おい、あの赤い髪、間違いない、ヤツだ。アカサビだ」

しかしそんな言葉を、残りの二人はまるで意にも介さない様子だ。

「ああ？　なんだデメエは。部外者はすっこんでろカス」

「しかもなんだコイツ。パンクジャンキーかよ、ピアスだらけ。顔中穴だらけにしてピアスの数増やしたろか、ああん？」

「お、おい、よせよ」

なおも赤い髪の人を挑発する二人を、そう言いながら止める男。

だが、興奮状態の男たちはまるで引き下がろうとしない。それどころか――

「駅周辺で最大規模のスカイラーズに喧嘩売ってきたんだ、生きて帰す訳にはいかねえよな」

そう言いながら、赤い髪の人とぼくを順番に見てくる。

やっぱり、ぼくのことまで忘れてくれてはいないようだ。

その男は拳を握り、指の骨を鳴らしながら言った。

「スカイラーズ一喧嘩っ早い男、ペーパーナイフの田中たあ、俺のことだ」

うん、すごく弱そうだね。

「知らねえ」

即答した赤い髪の人。まったく同意見だった。

「ふ、ふん。まあいいさ。いまは知らなくても、俺の名前を聞けば誰もが恐れて道をあける、そんな不良に俺はなるからよ」

あ、死亡フラグ。

赤い髪の人――さつきアカサビとか呼ばれてたつけ――が、容赦ない拳をペーパーライフだかなんだかかっていう異名の人に叩き込む。

さつきまで遊具の近くにいたはずの赤い髪のアカサビさんは、その大きい体には似つかわしくない速い動きで、気付いたらその距離を一気に詰めて男を殴り飛ばしていた。

濃い緑のダウンジャケットに隠れて確認することは出来ないが、そのスラリと伸びた腕は恐らく筋肉の塊かたまりだろう。そうでなければ説明がつかない吹き飛び方をしていた。

「べらべらとうるっせえんだよ」

アカサビさんは、握り拳を作ったままそう言った。

続いてもう一人も、アカサビさんに向かっていた。

そいつは、目の前で仲間を吹き飛ばされ、茫然ぼうぜんと佇たずんでいたかと思うと、急にスイッチを入れられた壊れかけのオモチャみたいに、不格好な姿勢で拳を構えた。

「よくもペーパーナイフを……ぶ、ぶっ殺したらあ！」

叫び声とともに突進した不良を、アカサビさんは半身だけ翻ひるがえしていなすと、すれ違い様さま

に男の襟首を掴んで思い切り引っ張った。すると、勢いに乗った男の体の前進運動のエネルギーが、襟を通してすべて男の首にかかって、一瞬呼吸を止めさせた。

息苦しさからか、あるいは単純に喉の痛みからか、男は地面に膝をつくくと、喉を押さえながらむせ返っている。

その隙をつくように、後頭部あたりに容赦のないアカサビさんの蹴りが入り、男は意識を失ってその場に倒れ込んだ。

え、ちよつとなにこの赤い髪の人。

アカサビさんって、この物語の主人公ですか？

第一章——階調変更

1

翌日が金曜日だからって、夜更かしして深夜アニメをリアルタイムで見ようとするから、あんなに恐ろしい体験をするようになってしまったんだ。

二年三組の教室。ぼくは登校するなり、自分を戒める意味で目をつむり、瞑想にふけつた。決して眠たいという理由で机に突っ伏し、目を閉じている訳ではない。本当だよ？

そんな崇高な瞑想時間を邪魔するように、クラスメイトの談笑し合う声が目についた。

どうしてヤツらは、ちよつとの時間大人しくしていることが出来ないのだろうか。学校という場所は自分だけの場所ではないということを、いい加減理解してもらいたいものだ。

まあ、直接は言わないけどさ。

それにしてもつくづく思う。ホント、こういうときクラス内ポッチは楽がいい。

高校生活もすでに二年目の二学期に突入して久しいというのに、クラスメイトの誰からも話しかけられないことがないから、こうして登校早々に眠りこけていても、なんの違和感

もない。

べ、別に寂しくなんかないんだからね！

机に突っ伏したまま、散漫さんまんとなる意識の中で、ぼくは昨夜の出来事を思い返していた。

赤い髪の男。確か名前はアカサビと言ったか、彼の圧倒的な力によって撃退された二人の不良。残りの一人にその矛先ほこさきが向きかけたところで、男はアカサビさんに待ったをかけた。

「ま、待ってくれ。あんたの眠りの邪魔をしたことは謝る。だから、ここは見逃してくれ。喧嘩屋アカサビに楯突たてつこうなんて思っ
てないからさ」

「ああ？ オレのこと知ってるのか teme。名前
は？」

アカサビさんの問いに男は答えた。

「御堂みどう数かずし」

御堂と名乗った男は、アカサビさんに一撃で沈められた仲間二人とはどこか違って見えた。

単純に容姿を見るかぎり、倒された二人ほど気合の入った不良という印象を受けなかったためだろうか。短髪の髪は、街灯の灯りでもわかるくらい派手な金色で、短髪の髪をワックスで立たせたリーゼントマツシユとかいう噂うわさのオシャレヘア。服装は黒のライダースジャケットを着用しており、不良として突っ張るためというより、モテることを意



識したようなチャラチャラした印象を受けた。

アカサビさんは、そんな御堂の姿をまじまじ眺めてから一言。

「御堂？ 知らねえ名前だ」

「当然だよ。俺はあんたほど有名な人じゃないんでね」

「ああ？ そのせいで、こっちは平和に過ごしたいっていうのに、テメエらクソ不良連中から絡まれていい迷惑なんだよ」

「最強の喧嘩屋を倒したとなれば、不良界で一躍その名を広められるからな。野心のある連中は無謀にも挑むだろうさ」

「そもそも勘違いしているみたいだが、オレは喧嘩屋じゃねえんだよ」

「喧嘩屋でもない人間が、不良グループをことごとく潰して回るものか」

二人のやり取りを見てはくは思った。

——あれ、完全に空気だばく。

ならばここは素直に、邪魔者は退散すべきだと考え、二人に気付かれないようにこっそり逃げ出そうとする。

二人の目を逃れ、なんとか公園の出口近くまでやってきたばくは、そこで恐ろしい光景を目の当たりにした。さっき、ガード下で見かけたバイク集団のうち、ばくを追ってこなかった数人が仲間を呼んで、公園に押し寄せてきたのだ。

「なんだよ、まだピンピンしてんじゃん。あいつらなにやってたんだよ」

ばくを見るなり、不良の一人がそう言った。

数にして二〇人近かったと思う。

公園の外へと通じる道はすべて囲まれてしまったため、ばくは仕方なく逃げてきた場所に再び戻ることになった。

不良たちは、公園を取り囲み、逃げ道を完全に封じたことで安心しきっているのか、薄ら笑いを浮かべてはくとの距離を詰めてくる。

「おい、逃げ場なんてどこにもないぞー」

ガラガラ笑う不良たち。だが、公園内で横たわる仲間を発見すると表情が険しくなった。

「テメエがこいつら殺ったのか？」

「ち、違います」

ばくは必死に首を横に振った。

「じゃあ誰が——」

不良たちの言いかけた言葉が途中で止まる。その視線の先には、彼らの仲間である御堂とかいう男と、倒れている二人を一撃でダウンさせたアカサビさんの姿があった。

「これはどういう状況だ、御堂。なんで喧嘩屋がここにいる」

「す、すみません。俺にもなになんだか」

「状況は極めて単純だ、タコ」

御堂の言葉を遮ったアカサビさんはそう言いながら、肩を回した。

「うじゃうじゃ集まってきたクソうぜえハエ連中を、これからオレが一匹残らず叩き潰すってことだよ」

「上等だオラ、オメエらやっちまえー！」

二〇人以上の不良集団が、たった一人に襲いかかろうとしていた。

アカサビさんがどれほど強いのか知らないが、さすがにこの人数では集団リンチだ、助けないと。そう思い、一步踏み出そうとしたけれど、体が動かない。染み付いたオタク根性が、不良たちを前にぼくの足をすくませる。

彼を巻き込んでしまったのはぼくなのに、なにも出来ない不甲斐ない自分が嫌になる。せめて警察に通報を、そう思いスマホを取り出すと、アカサビさんは右手をあげ、ぼくを制して言った。

「大丈夫。黙って見ていろ」

その様子を見て、不良たちが声を荒らげる。

「なんだよアカサビ、死ぬ覚悟でも固まったか！ テメエの首を手土産に、うちのチームも千葉連合の上位組織の仲間入りだ」

「へえ。連合なんてものがあるのか。じゃあアンタらを潰した後は、その千葉連合ってヤ

ツを潰すでしょう」

「金で雇われる喧嘩屋風情が、粹がつてんじゃねえぞ」

「だから何度も言ってるんだろうが。オレは喧嘩屋じゃねえよ」

拳を構えたアカサビさんは、そして言った。

「オレは、正義の味方だ」

その後は、まるでアニメでも見ている気分だった。

二〇人も不良が次々と、たった一人にやられていく様に目を疑ってしまう。

お世辞にも連携が取れているとは言えないチームだったが、それでも数に勝る優位なし。一対二〇では、そもそもアカサビさんに勝ち目などないはずだった。だが、結果はぼくの想像とは違っていた。

繰り出される、不良たちの拳と蹴り。それを、まるですべて見えているかのように簡単に避けてしまうアカサビさん。そして、その動作の中で、近くにいる不良たちの足を破壊する勢いでローキックを入れていく。たちまち身動きが取れなくなった不良たちは、逃げ出すことも許されないまま、アカサビさんの圧倒的な力を味わうことになった。

これが御堂とかいう不良が言っていた喧嘩屋の力なのだろう。

「クソがつ」

死屍累々の中、やられた足を引きずりながら、男が言う。どうやら彼がこのチーム、ス

カイラーズのリーダーらしい。

「おい御堂！ 千葉連に連絡入れる。このクソ野郎の息の根、止めるために兵隊出させろや！」

ただ一人、早々に命乞いをしていた男、御堂数だけはアカサビさんの攻撃を受けていなかった。だが、それは御堂が手を出さないと宣言していたからであって、敵対行動を取るとわかれば、アカサビさんも黙ってはいないだろう。

御堂は状況を精査し、判断を下した。

両手をあげ、降参のジェスチャーを見せ「お断りです」と。

「テメエ！ 裏切るつもりか。新参のお前を取り立ててやった恩を忘れたとは言わせねえぞっ」

「ギャーギャー喚くな、鬱陶しい」

アカサビさんが、喚き散らす男に近づく。

「だいたいよお、このチームは今日をもつて解散なんだよ。なんかこころ一带を支配したつもりでイイ気になってるチームがいることは知ってたけどよ。まあ実害があった訳じゃないし大目に見てきたが、少しハシヤギすぎたな」

「テメエら、これで終わったと——」

「うるせえ、もう寝てろ」

アカサビさんに、ゲシツと顔面を靴底で容赦なく蹴られる男。入り方が悪かったのか、そのまま昏倒してしまった。

アカサビさんはあくびを漏らすと、振り返って言った。

「御堂つつたか。お前、今回だけは見逃してやるが、次にオレの目の前で舐めた真似したら、今度は容赦しねえから」

こくこくと頷く御堂に続いて、「それからお前」と矛先がぼくに向かう。

「ハ、ハイッ」

ぼくは思わず姿勢を正し、直立で返事していた。

「ケガ、なかったかよ？」

アカサビさんは品定めするみたいにじつくりこつちを眺めた後、そう言って破顔したのだった。

な、なんとというイケメン。顔もさることながら、精神的にもイケメン過ぎるよこの人、アニキって呼ばせてほしい！

アカサビのアニキは背中を向けると、言った。

「オレはもう行く。お前もそこでびてる連中が目覚ます前に帰ったほうがいいぞ。なにがあつたか知らないが、これに懲りたら、パンピーが夜の街に聞わらないことだ」

当然そのつもりだ。もう二度と、今日みたいな真似をするつもりはない。アニメは所詮、

虚構にすぎない。どれだけ願っても、この現実世界から抜け出して異世界へ旅立つことなど出来ないのだ。

「ツキシヨ、これからどうしたらいいんだ」

頭を抱えた御堂は、どうやらこれからのことを考えるので忙しいようなので、邪魔をしないよう、ソツと帰ることにした。

そうして家に帰る頃には、すでに朝日が昇りはじめていた。

結果として、ぼくは睡眠不足のまま登校を余儀なくされ、こうして惰眠をむさぼっていた訳だ。しかし、いつも騒がしいクラスメイトたちの喧騒が、今日は余計に耳に刺さる。目を閉じていることで感覚が鋭敏になっているのかとも思ったが、それにしても騒がしい。

『なあなあ、もうすぐ文化祭じゃん。準備どうなってるの？』

『衣装メンバーはかなり前から準備入ってるらしいけど、俺ら雑用は前日にならないと教室を飾り付け出来ないから気楽なもんだ』

『衣装なあ。女子連中、どんな格好するんだろう。楽しみだな』

ぼくの目の前で、男子二人がそんな会話をしていた。

そう言われてみると、クラス内の浮足立った雰囲気は、イベント前特有の騒々しさだ。

文化祭なんて、ぼくに言わせれば時間の無駄としか思えないイベントで、ソシヤゲのイベントダンジョンをやっている方がずっと有意義な時間の過ごし方だと思う。

さて、そろそろ目も覚めてきたので、クラス内の喧騒をBGMに、スマホでも弄っていることにしよう。

そう思って机から体を起こしたそのとき、まるで健やかな目覚め直後のスズメのさえずりのような、あるいは萌ゲーのヒロインの甘えた声のようなソプラノボイスがぼくの耳に届いて、思わず視線を向ける。

彼女は、加須浦百合と書いて天使と読む女の子。小柄な体は、まるで深窓の令嬢のようにしなやかで、首筋まで伸びたポプカットの黒髪には、光を受けて天使の輪が見えた。その容姿とは裏腹な天真爛漫な性格と、無邪気な仕草を見ているだけで、ぼくはもう、辛抱堪らなくなる。

その天使、もとい加須浦さんは、「わあー」と声を出したかと思うと、「ねえねえ芽子、これ見てこれ！」と机をバンバンと叩いた。

ああもう可愛い。可愛いなホント。

「あん？」

加須浦さんに呼ばれ、スマホから気だるげな表情を覗かせたのは石神芽子。見るからに脱色した髪をドライヤーの当て過ぎによるものだと言い張って教職員を黙らせる彼女は、そのセミロングの髪の毛先に最近ゆるふわパーマを掛けたのだと自慢げに大声で話していた。本当、どうでもいい。

そして、スラリと伸びた足を惜しげもなく晒すミニスカートの、独自のセンスで着崩した制服。加えて学校だというのに化粧けいしょうしていることを隠そうともしないその態度。これ屍しかばね確定、漫画じゃメインヒロインにならないタイプだよ、彼女。

おっと、それに比べて多くのメインヒロインであるところの加須浦さんが、頬ほを膨はらませているぞ。

「もう冴子、ちゃんと聞いてよ。ストジャ更新されてるの見た？」

「見てないよそんな不良雑誌。ストリートジャーナル、だっけ？」

「ストジャは不良雑誌なんかじゃない。れっきとしたファッション誌だよ。冴子、読者モデルなんだし知ってるでしょ？」

「いや、あれメンズじゃん。ウチがモデルやってるのティーンズ誌だし」

「それにしたってストジャは要チェックだよ。雑誌としてはファッション情報誌の体裁ていさいをとっているけど、特集で組まれる若者カルチャー紹介が最高なんだから。それに私が言っているのはそのウェブ版。コンビニに売っている雑誌版とは内容の濃さとか比較にならないだから。特にいま注目なのがこの最新記事。謎のグラフィティアーティストが、かなり大きい不良グループを潰したんだって。これ、この街のこと書いてあるんだよ？」

「だからあ、ウチ、そういうの興味ないし」

そう言つて、石神さんは加須浦さんの話をバツサリ切った。

「えー、カッコよくない？ 正体不明のライター、悪を討うつって」

「どうせブ男よ、そいつ」

「そんな夢を壊すこと言わないでよお、もう」

加須浦さんは頬を膨らませ、眉間まゆまにシワを寄せた。

天真爛漫なアイドルみたいな加須浦さんと、女子のファッションリーダー的存在で、しかも実際に読者モデルをやっているクールな石神さん。この二人は、これが不思議と馬が合うのか、いつも二人で行動している。

その見た目の華やかさも相まって、このクラス、いや学年全体で見ても発言力の高いリーダー的存在と言えるだろう。それに付随ふすいする煩わしいストラップのように、運動部に所属する男子連中が取り巻きみたいに輪を形成している。運動部のくせに髪は長く、眉毛まゆげなんかも手入れしちやつて、スポーツマンらしくない。

いつも一緒にいる石神さんや、その運動部男子のチャライ風貌ふうぼうとは違い、加須浦さんはまるでそう、それは古式ゆかしい日本人らしい黒髪からしてどこか違う。

つるんでいる男子は髪をワックスでガチガチに固め、石神さんはアイロンだかなんだかでくるくると髪をウェーブさせたり、茶髪に染めたりしている中で、加須浦さんは作り物ではない、自然体の可愛らしさを持っていた。女子のリーダー的存在である石神さんと仲が良いことも相まって、女子生徒からも人気が高く、当然、男子からの受けも良い。

もちろん、ぼくだってその他大勢の内の一人だ。誰だって、加須浦さんに憧れを抱く。

そんな風に、物思いに耽^{ふけ}っていたため油断した。

「うっわ、キモオタがこっち見てるし」

石神さんがそう言っただけの方を指さした。慌てて視線を外したがもう遅い。あの性悪女の言葉に焚^たき付けられた運動部男子連中が、クラス全体に聞こえるくらい大きな声でタケタと笑いながら、ぼくの方を指さして悪態をつく。これが現実。ぼくの世界。

そもそも人にはそれぞれ個別の世界、色がある。

ぼくの世界は、まあ色でたとえるなら灰色。御覧^{ごらん}の通り、くすんだ冬の空と同じ。

一方、大声で笑い合う男女グループは恐らく、ネイビーブルー。真夏の海のように華やかで眩しい。それを言葉にするならば青春、だろうか。

詩的で素敵な自分の世界に浸^かるあまり、本来は危険察知能力がサバンナの小動物並みに高いはずのぼくが、あるうことか出遅れてしまった。

気付くと、壁沿いの席を遠巻きに囲むようにして笑っていたはずの運動部男子たちが、ぼくの机の周りを取り囲んでいたのだ。

借りてきた猫だってもう少し生きた心地^{こち}を楽しみむだろうというくらい小さくなるべく。

ほんと、物理的にも小さくなったみたいない気分だった。

やがて誰かが口を開いた。

「お前さあ。教室でゲームやるとかどんだけオタクだよ。見てて萎^なえるわ」

別にぼくがどこでなにをしていたって、彼らにはなんの影響もないはずだ。

だが、彼らはそうは思ってくれないらしい。彼らにとつてこの教室は自分たちの部屋で、ぼくはそこに無断で入り込んだ外敵なのだ。いや、もしかしたら害虫とでも思われているのかもしれない。

だからぼくは、「ご、ごめん。気を付けるよ」と謝る他ない。

口ごもった姿を見て、小バカにしたように誇張してぼくの口真似をした野球部の江津君^{えづ}に、ドツと笑いが起きる。

「マジモノマネサイコー。江津ヤバいわ、芸人なれてホント。あ、そう言えば」

あー、腹イテ、と言いながら、確かサッカー部の能田君^{のうだ}だったか、彼がぼくの机にパンツ、と手を置いて顔を近づけてくる。

「確か間久辺も、モノマネ得意じゃね？」

マクベ？ はて誰のことだろう。そんな他人のフリをして現実逃避を試みるくらい、ぼくはもう、生きた心地がしなかった。

モノマネ？ そんなのしたことないし、ましてや彼らの前で披露^{ひろう}するような状況がこれまでにある訳がない。

それなのに、こんな無茶ぶりしてくるのは、彼らの後ろで控えている石神さんと加須浦さんに見せつけるためなのだろう。これは見せしめだ。どうやら多くのようなクラス内カーストの最下層に位置するオタクには、彼女たちを視界に入れることすら許されないらしい。

「よっし、じゃアrikエスト。死にかけのヒキガエルの真似やつてくれよ」

「お、いいじゃんそれ、面白そう」

「やれよ、間久辺」

運動部三人に圧力をかけられ、ほくは身動き一つ取れなくなっていたというのに、さらに煽られる。

「よおみんな、間久辺がこれからとっておきのモノマネ披露するってよ！」

最悪のアシストを見せたのはバスケ部のエース、木下君。ほんとキラバースだ。

いよいよもって死刑台に立たされた気分になったが、もう引き下がることも出来ないし、時計に目をやっても、まだ授業が始まるまで数分ある。このイタズラを時間切れで乗り切るのも無理そうだった。

「早く、みんな待つてるよマクベ」

石神さんが急かすようにそう言い、教室内にマクベコールが巻き起こる。

マククーベ、マククーベ、マククーベ、マククーベ……………

ああ、もう逃げられそうにない。

ほくは席から立ち上がると、教室の開けた所まで行き、そこで仰向けに寝転がって、手足を不格好に持ち上げる。喉の奥から、悔しさとか怒りとか、そういうのを絞り出すように「グエエ」と鳴き真似をし、ボタンと手足を地面に落とした。

死にかけのヒキガエル？ 死にかけはほくの方だ。

案の定、教室の中はまるで通夜の席みたいに静まり返っていた。笑うな、と運動部連中が目で合図したのだろう。クラスメイト、誰一人として物音ひとつ立てない。

もう死にたい。本気でそう思った。

だが、次の瞬間、「あはは」と笑い声があがる。

それは嘲笑とかではない、心の底から面白いものを見たような笑い。

顔を向けると、教室の中心で加須浦さんが大爆笑していた。

席から立ち上がった彼女は、運動部連中に近づくと、「言った通りサイコーだね。江津君なんかよりずっと面白いよ、彼」と言った。

それから、加須浦さんはなにを思ったのか、その足の方向をほくの方に向け、近づいてきた。やがてその足は横たわるほくのすぐ側まで来て、止まる。

もちろん紳士なぼくはこれっぽっちも彼女の下着を覗こうなんてしていなかったけれど、ただ地べたに横たわっているこの状況では、見えてしまうのは仕方ないだろう。不可抗力というやつだ。

だが残念ながら彼女はすぐに膝を折ると、ぼくの手を掴んで引き起こした。いや、残念どころか彼女に触れられただけで幸運か。まあとにかく、加須浦さんはぼくを起こすと、「ほんと、面白かったよ」と言っただけで、また自分の席に戻って行った。

同時に、始業の鐘が鳴る。

悔しそくにこちらを睨み付ける江津たち運動部連中は、見るからに不愉快そうに自分たちの席に戻って行った。

2

「マクベス。そりゃ災難だったな」

携帯ゲーム機に視線を落としながら、友人の廣瀬はそう言った。マクベスとは仲間内で呼び合うぼくのあだ名みたいなもので、いまは部活動という名目で集まった廣瀬と中西と三人で、美術室で協力プレイのゲームに熱中しているところだった。

彼らは趣味を通じて出来た学内唯一の友人たちで、ゲームのマップ移動中に、さつき教室で起きた惨事を説明したところ、他クラスの二人も「俺たちもクラスで似たような境遇だ」と笑っていた。正直、ぼくらのような生徒は生きづらくなっているのだ、学校という場所。

美術室は校庭と面していて、グラウンドからは野球部とサッカー部の気合の入った掛け声聞こえてくる。その中に、さつきぼくをバカにし、笑っていたクラスメイトの姿も見受けられた。

「まあ、俺なんてこんなブサ面に産み落とされた時点で、この人生詰んでるから。中西はリアルな脇役みたいな顔してるし、マクベスは見た目暗そうってこと以外はまあ普通だけど、他人と二秒以上目を合わせられない挙動不審者じゃん？」

「ひ、ひどいこと言うな」

「そうだそうだ、ぼくだって目を合わせることくらい出来る」

ほら、と言いながらぼくは前髪をかきわけ、廣瀬の瞳をまっすぐ見る。

「いや、俺相手じゃしょうがないだろう」

確かに廣瀬の言う通りではあるな。

完全なる格差社会。それが学校だ。運動部に力を入れているこの鹿橋高校は、偏差値的には中間よりも少し下回るレベルにある。運動部で青春を費やすために入学した生徒を除

けば、頭の空っぽなギャルや不良生徒か、あるいはぼくらのような趣味に没頭するオタク生徒が集まっているような極端な学校だ。当然、オタクは虐げられる星の下にあった。

ここ、美術部のような文化系の部活動はそんな根暗な生徒たちの隠れ蓑としての役割を持っていた。美術部はぼくらを含め、名前だけ書いてそれきり来る気配のない幽霊部員ばかりで、まじめに活動をしている生徒など皆無だ。

「て、敵みつけ。ふ、二人もさっさと合流してくれ」

相変わらず、仲間内でもドモリがちな中西は、教室ではほとんど一言も話さないという。そんな彼の貴重な言葉に、ぼくと廣瀬もゲームに熱中する。

「死ね死ね死ね！」

モンスターを攻撃しながら、時々クラスの入らないチャラ男の名前を挟んだりして笑い合うことで、復讐心を満たすくらいが、ぼくらに出来るささやかな反抗だった。

クエストをクリアし、ゲームに一区切りがついたところで廣瀬が言った。

「そうだ。昨日の『ドドドメキ』見た？」

「で、出た、今期最大の問題作『ドキドキ明星貴族学園』！」

ぼくも嬉しくなって答えた。

「録画しておいたけど、それでも目覚ましかけて起きて見たよ。一〇分前くらいから画面に釘付け」

深夜にやってくるアニメの話題で盛り上がる。ぼくらにとっては鉄板ネタで、アニメの話なら半日語り合っても飽きることはない自信がある。

「異世界キャラのミリア様、ま、マジ女神」

「声が良いんだよな。声優のセリナはクールキャラ外れないし。俺は前からセリナ絶対当たって目つけてたし」

「出たよ声優オタ」

「で、でもやっぱ、作画はさすがじゃね？ あの制作会社が立ち上がった時点で、げ、原作の世界観を良い意味で壊してくれたし、あ、あの異世界に通じる魔法陣とか、ま、マジ鳥肌立った」

「お、さすががわかってるじゃん！」

ちよつと待つてと言ひ、ぼくは部屋の中を移動して引き出しの中に入っている画用紙と色鉛筆を持つてくる。話のタネに、すぐ仕上がるように軽いタッチで頭の中のイメージを画用紙に投射していくと、廣瀬と中西が徐々に感嘆の声をあげる。

「マクベスは相変わらずスゲーな。もう描けるようになってんじゃん」

ぼくの描いた幾何学模様を見ながら、感動したように声をあげてくれる二人。

昨夜、ぼくはテンションが上がり居てもたつてもいられず、ガード下の壁にスプレーインクで同じものを描いたのだ。それに比べれば、紙にペンで描くことなど造作もな

かった。

「マ、マクベス、あ、アニメのキャラとかも普通に描けるもんね。うらやましい。ま、漫画とか描いてみたらよくね?」

「無理だよ。どんなに絵が描けたってストーリーが全然だもん。どうやったっていままで見たラノベのバクリにしかならないし」

「そう言うってことは描こうとしたことあんのかよ」

墓穴を掘ってしまった。ただまあ、友達にちよつとした黒歴史を知られることくらいなんということはない。

なんて言ったって、ぼくらの黒歴史は現在進行形な訳だし。

下校時刻になると、ぼくらは美術室を後にした。駅前のゲーセンに格ゲーの新台が入ったというので様子見に行こうと誘われ、駅までの道を談笑しながら歩く。

「俺思うんだけどさ。最近アニメキャラの中にまでギャルの存在が浸透してきているの、うんざりするんだけど」

廣瀬が心の叫びとも取れる言葉を口にした。

まったくもって同意見だ。

「ギャ、ギャルとか学校だけで見飽きてる。ま、街を歩いたって、う、うんざりするくら

いいっぱい居るし」

中西の言う通り、特に駅に近づくにつれてその様相は顕著に見えてくる。

県内でも有数の栄えた駅として有名なこの土地は、特に若者向けのファッションやアクセサリー、小物などを取り扱う店舗が多く存在している。そのため、放課後ともなれば周辺地域の学生、その中でもギャルやチャラ男が下品に笑い合いながら駅界隈を闊歩する姿が見られるのだ。オタクにとつては居心地の悪さが半端じゃない。

「どうしてあんな場所に、周辺で一番デカイゲーセンを建ててるかな」

これも心の叫びだった。

駅と併設されるように建つ五階建てのビルは丸ごとゲームセンターになっており、一階がクレーンゲーム、二階が体感ゲーム、三階がメダルゲーム、四階が筐体ゲームとバリエーションに富んでいた。最新のゲームが揃っているあの場所は、ぼくらにとって理想的なゲーセンなのだが、いかんせん場所が場所だけにチャラ男やギャルの姿が気になってあまり近づこうとは思わない。今日みたいに新台でも出なければ、寄り付かない場所だ。

ゲーセンへと向かう道中、線路を越えるためのガード下が見えてくる。そこに何やら、派手な見た目のヤンキー風な男が立っているのが見えた。

「な、なあ、どうする?」

「どうするったって中西、あそこ通らないとゲーセン行けないじゃんかよ」

よほど新しく入ったゲームがやりたいのか、いつにたく強気な廣瀬。だが、声は震えていた。

二人は単純にヤンキーを恐れているのだろう。

だが、ぼくは違った恐怖を抱いていた。

ガード下にいる男は、あそこでいったいなにをしているのだろうか。そこは紛れもなく、昨夜、ぼくが壁に絵を描いた場所なのである。

不良の背後をなるべく早足で、でも相手に意識させない程度に自然な速度で歩く。あと少しで出口だ、と安心しかけたところで、「おいお前っ」と声飛び、思わずびくつと体が跳ねる。恐る恐る振り返りそこに立っていた人物を見て、ぼくは思わずハッとして息をのんだ。

御堂数。

昨夜、ぼくを追い回していた不良の一人だ。

「見つけたぞクソガキ。散々探し回ったっていうのに、最後はお前の方からやってくるのはな。犯人は犯行現場に戻るってマジなんだな」

御堂の視線は真っすぐにぼくに向いていた。

廣瀬と中西は、「知り合い？」とうかがうようにぼくに聞いてくる。

まさか、知り合いなものか。

ぼくはこの男に襲われかけたんだ。

だが、そんなことを言ったら二人を怖がらせる訳にもいかない。「ちよつとね」と、ぼくは答えた。

それから、ぼくは急用が出来たと言い、二人を行かせ、御堂と二人きりになる。

御堂の口ぶりからして、ぼくを探していたのは明らかだ。間違いない、昨夜の出来事に関わることだろう。それに二人を巻き込む訳にはいかなかった。

「それで、ぼくを探していたのはなぜです？ 復讐とかだったら勘弁かたなしてくださいよ。アカサビさんに、ぼくには手を出さないって約束してたじゃないですか」

「そう。それでお前を探していたんだ。アカサビ、あいつの居場所を知らないか？」
ぼくはかぶりを振った。そんなの知るはずない。

「チクショウ、マジかよ」

本気で焦っている様子の御堂。少し、気になった。

「あの、なにかあったんですか？」

「なにかあったかじゃねえよ。お前のせいだな、こっちは千葉連に殺されそうなんだ」

「え、どういうことですか？」

「ああ？ お前、学生なんだろう？ なんて見てないんだよ」

「す、すみません。それで、見てないってなんのことですか？」

「これだよ、これ！」

スマホを手渡され、画面に映し出されているサイトのトップ画面には『ストリートジャーナル』と書かれていた。確か、今朝クラスで加須浦さんが言っていたサイトの名前だったはずだ。

いったいほくどう関係しているのか、手渡されたスマホをスクロールさせた。

《オンライン版 ストリートジャーナル》

若者文化の現在を斬り取るWEBマガジン！

〔CONTENTS〕

- 〔マッドシティに現れるダークヒーロー、その名はアカサビ〕
- 〔関東最大の暴走族スカルライダーズ内部分裂 高次凜矢VS如水丈二〕
- 〔女性hiphopホップ集団KAGEKI（華撃）とは〕
- 〔今若者に絶大な人気を誇るシルバーブランド KITT〕
- 〔元暴走族が属する自警団による行き過ぎた世直し 街クリーン企画〕
- 〔編集部が振り返る、夜の街、度重なる抗争の歴史〕

〔芸術？ 景観破壊？ CAGA丸氏が語るグラフィティとは
new!〕

〔独占 謎のライターがスカイラズを壊滅。その正体は？〕

過去の記事でも少し紹介したが、街の壁などにスプレーインクによって絵や文字を描く行為をグラフィティと言う。

当サイトでも以前特集した『CAGA丸氏』が街では先駆的グラフィティライターとして有名であるが、氏は土地の所有者から許可を得て行為に及ぶプロのライターである。

だが、多くのグラフィティライターは無許可で公共の壁や私有地でのライティング行為に及んでいる。これは刑法における器物損壊等の罪に問われる重大な犯罪行為であることを初めに理解しておいてもらいたい。

さて、昨夜、駅周辺で勢力を伸ばしていたスカイラズというチームが一夜にして壊滅するという事態が起きた。記者Tが取材したところ、彼らは自分たちの縄張りにタギング（※自らの名などを刻む行為）しているライターを発見し、その人物を襲撃したところ、逆に振り返りに遭い全滅させられたのだという。

一昔前まで、不良グループがチームを表す手段として用いていたものは色だっ

た。メンバーがチームのシンボルとも言える色をファッションに取り入れることで、仲間意識を強め、同時にチームの縄張り主張にも利用されていた。

しかし、近年ではファッション性を重視する若者カルチャーの変遷により、いわゆるカラーギャングと呼ばれる集団は過去の遺物として消えていった。

スカイラーズを壊滅させた新進気鋭のグラフィティライターは、これからの不良グループの在り方を示すように、タギングを宣戦布告の道具として利用した。相手の縄張りに自らのタグを張り付ける行為はまさに、陣取りゲームそのもの。

再三の警告となるが、グラフィティは許可なく行つと器物損壊等の罪に問われる行為であり、筆者は決してこの行為を美化する立場にない。しかしながら、今後、不良たちの抗争の在り方を変えるであろう、この名もなきグラフィティライターは街で最も注目される人物になると言えるだろう。

彼の属するチームとは果たしてどこなのか、今後も引き続きこのグラフィティライターを追っていきたいと思つ。

（一〇月一〇日 記者Tによる寄稿）

ぼくは開いた口が塞がらなかつた。
新しい不良の在り方？

スカイラーズの壊滅？

新進気鋭のグラフィティライター？

なにそれ美味しいの？ つて言つてる場合じゃない。

意味わかんないよ、ホント、意味わかんない。

焦るぼくの手からスマホを奪い取ると、御堂はため息を吐いた。

「わかつただろう？ お前はいまや一躍有名人だ。なんのつもりでスカイラーズの縄張りにタギングなんてしたのか知らないが、グラフィティライターとしては成功みたいだな」

ぼくは大慌てで首を横に振つた。

「あの、ぼくそんなじゃありません」

「は？」

「だから、グラフィティライターなんかじゃないんです、一般人です。そもそもグラフィティとかタギングとか聞いたこともありませんけど」

「嘘つけ！ スプレーインクで壁に落書きして、思い切りライターの手口じゃねえかよ。いまさら誤魔化そうつたつて通じねえぞー」

「本当ですよ」

「じゃあなんでスプレーインクなんて持つてんだよ」

「あれはプラモデル用の塗料です」

「は、はあ？　じゃあなんであんな夜中遅くに一般人が出発してたんだよ」

「深夜アニメ見てたんです。『ドドメキ』っていうラノベ原作のやつ。作者はコウツキユキ先生っていつて、前作の『ハチコマ〜八月末まで困ったちゃん〜』と世界観を同一にするファン心をくすぐる仕様で」

「んなこと聞いてねえよ！　熱く語んなよ！　それどころじゃねえんだよっ！」
肩で息をしながらご丁寧にも三段階のツツコミを入れてくる御堂。その目は尋常でないくらい血走っていた。

不良ってホント怖い。

「だったらお前、そもそもなんで壁に落書きなんてしてたんだよ！」

「いや、その、さっき言ったドドメキってアニメで主人公が異世界にワープするんですけど、その扉が出現する場所がこのガード下にすごい似てまして、ファンとしては居てもたつてもいられなくなりアニメの放送終了と同時に家を飛び出し、気が付いたらアニメと同じ魔法陣を壁に描いていた次第です、はい」

「一息で説明してくれてありがとよ！　でも全然意味わからねえよ！　納得出来ねえよっ！」

やっぱ怖い、この人。

「おい待て。整理するぞ」

こめかみあたりを押さえながら、御堂は言った。

「お前はグラフィティライターじゃなく、不良ですらないと？」

「はい」

「それどころか、まったく正反対のオタクだと？」

「いや、そんな言うほどオタクって訳でも」

「ここで照れんじゃねえよ！　今さら誤魔化せるか！」

やっぱ駄目か。

はあー、と深いため息を吐いた御堂は、心底困った様子を見せた。

だが、そんなに大変な事態だという実感が持てず、ほくほく首を捻りながら言った。

「そんな悩むことないじゃないですか。実際ほくほくはオタクで、御堂さんが居た不良グループを潰したのもアカサジさんだった。このウェブサイトに書いてあることは全部デタラメですよ」

「そんなこと言われなくてわかってんだよ。でもな、ストリートジャーナルって雑誌はとにかく若年層に強い影響力を持っているんだ。特にウェブ版はスマホの普及で若い世代に爆発的な支持を集めていて、信者がいっぱい居る。そこで書かれた内容は、だいたいの若者が真実として受け入れちまう」

なにそれ、まるで情報操作のようだと思っただとほくほくは思った。

若い世代は自らの経験則で物事を測れないため、雑誌やネットなどの情報ツールをそのまま信じてしまう傾向が強いと聞いたことがある。

特に今回、ストリートジャーナルで語られている内容の大筋の部分が事実であることが厄介なのだ。

ぼくが壁に絵を描いていたのは事実だし、それが原因でスカイラズが壊滅の憂き目を見たのも事実。ただ、問題なのはその間に発生した多くの要因が抜け落ちているということ。それによって、ウェブサイトに書かれている内容が真実から大きくかけ離れているにもかかわらず、結果だけは一緒だという事態に陥っているのだ。

「とにかく、いまはこの状況を乗り切る方法を考えねえと」

なにやら話を進めようとしている御堂だったが、ぼくにはまだ状況がいまいち呑み込めなかった。

「なにをそんなに焦っているんですか？」

「ああ？ この記事見たらわかんだろ。スカイラズってのは関東でも大規模組織である千葉連合に属していたチームだ。そこが潰された上に、相手が今後、街を代表する存在になるみたいな書き方されちゃあ、千葉連の幹部連中が黙っている訳ない。スカイラズを売った俺は殺されるかもしれないな、マジで」

「あんなら、大変なことになってるんですね」

「なに他人事みたいな面してやがんだ。テメエも立場は一緒だろ」

へ？ と思わず呆けた顔を見せたぼくに、御堂は苛立たしげに洪面をつくり、言った。

「言っただろう。お前を探していたって。千葉連が懸賞金をかけているんだよ。スカイラズを潰したグラフィティライターに」

「え、それって……」

「ああ。俺たちは県内最大勢力の千葉連合に目をつつけられちゃった訳だ」

あまりのことに言葉を失うぼくに対して、御堂はたたみかけるように言う。

「俺とお前は一蓮托生ってことだ」

3

電話が鳴った。

相手は廣瀬だった。

ぼくが電話に出るなり、廣瀬のかなり真面目な口調が耳に入ってくる。

「マクベス？ 良かった。大丈夫だったか」

どうやら廣瀬と中西は、さっきガード下で別れてからぼくのことを心配してくれていた

ようだ。二人を安心させるためにも、ぼくは電話に向かって、明るい調子で言った。「大丈夫だよ。さっきの人は知り合いだから」

「そっか。てっきりヤンキーになんか弱みでも握られて、厄介事にでも巻き込まれるのかもしれないよ」

鏡い。ぼくは悟られないよう気を付けながら口を開く。

「まさか、そんなことある訳ないじゃん。ぼくがビビりなの知ってるでしょ？ ヤンキーになんて近づこうとも思わないさ」

「だよな。お互い不良とは無縁の人生送っているし、心配いらないよな」

「わかってくれたなら良かった。それでごめん、まだ用事が済んでないからそろそろ電話切らないと。わざわざありがとね」

そうしてぼくは電話を切った。

心配してくれた友達に嘘を吐く罪悪感に耐えられなかったのと、そろそろ着くぞ、という御堂の言葉に促された結果だった。

ぼくは制服の上着を脱ぎ、持ってきていたパーカーを上から羽織る。今日は週末ということで、廣瀬たちと寄り道することを考えて着替えを用意していたのだが、こんな形で役に立つとは思ってもしなかった。

「そろそろ着くぞ。お前、いい加減キョドってんじゃねえよ。目が泳ぎまくってんぞ」

仕方ないだろう、これは生まれつきなんだから。

そうしてやって来た場所は、使われなくなつて廃墟はいきょと化したホテル。人通りもなく、地元の間では不良たちの溜まり場として有名で、ぼくなんか絶対に近づこうとは思わない場所だ。それが、なんの因果か、いまその場所に立っている。

「おう御堂！ 落とし前つけに来たのか。殊勝しゆしょうじゃねえかよ、ああ？ ぶつ殺される覚悟は出来てんだらうな！」

ぼくらを取り囲むようにして何十人もの不良たちが罵声を飛ばしていた。不良たちを見るとケガを負っている連中もいて、彼らがスカイラーズの残党であることがうかがえた。御堂への罵声が飛んでいるのはそのためだろう。

ぼくは上着のフードを深くかぶり、御堂から渡されたバンダナで口元を覆い素顔を隠している。千葉連の集会に乗り込むと言ったくせに、気遣いとして用意していた品がバンダナだけというのはおかしいと思う。

全方位から飛んでくる罵声の数々。やがてそれも落ちていくと、ようやく集団の中から動きが見られた。

罵詈雑言の飛び交う中で、比較的落ち着いた雰囲気ふんいきの男が現れる。御堂がさりげなく耳打ちしてきた。

「あれが千葉連幹部の一人。チーム「マサムネ」のリーダー、鍛島多喜親だ」